

「京都の知恵と文化を生かした環境懇話会」論点整理
～脱温暖化の京都府を目指して～
キーワード

世界レベルでのフレーム（ポスト2012）	
1	先進国　－　戦略と文化の違い（欧と米） 途上国
2	国別排出削減枠　－　2050年目標（2020年の中期目標？） ～ボトムアップアプローチ（セクター別アプローチ）とのギャップ 「地球はひとつだが、世界はひとつではない」

キーワード1：社会文化的フレーム

温暖化、格差問題、人口、食糧、エネルギーなど問題の多様性、問題に対する対処のプライオリティの多様性、解決する方向の指向性の違い、価値観の違い、人間の基本的な考え方＝文化の多様性の中で世界との一体性をどのようなフレームで求めるのか

- ・ 南北格差問題は地球温暖化問題に結びついている。
- ・ 世界レベルでは人口が増えすぎ、伝統の継続がうまくいかない。
- ・ 地球温暖化問題は「食」や「水」の問題でもある。大きな人がたくさんを量を食べ過ぎる。
- ・ 先進各国の違いは文化の違い。EUは社会的成熟指向、米国は経済成長指向。日本はどうか？
- ・ 世界には東洋と西洋の二つの方法がある。
- ・ 温暖化問題の根源に東洋と西洋の思想の違いがある。
- ・ 「共生しないと地球が壊れてしまう」という共通認識の持ち方。
- ・ 「共通だが差異ある責任」という考え方。差異をコーディネーションするのが文化の役割。
- ・ 一人ひとりの立場に立って真の満足が得られる暮らし方を世界全体で進めるには？

キーワード2：戦略的（ガバナンスの）フレーム

脱温暖化、CO2半減、セクター別アプローチ

- ・ 途上国における排出量はこれからも増える。先進国における排出量をゼロにしないと、排出量の50%削減は実現できない。
- ・ 途上国には「発展の権利」があり、これを頭から否定することはできない。
- ・ EUや米国が中期目標をはっきりとさせてくる中で、日本政府の姿勢が見えにくい。
- ・ セクター別アプローチは、G8環境大臣会合で、トップダウンアプローチ

による排出削減レベル代わるものではないと明言された。

- ・ 総量規制は普遍主義、一神教。セクター別アプローチは国ごとの実情に合わせた多神教。

日本のスタンス

『先進国の一員として、世界をリードする』

- 1 CO₂の強力な削減
 - ・ エネルギー供給構造とエネルギー多消費型施設のあり方
 - ・ 技術と経済のしくみのイノベーション

キーワード3：CO₂の強力な削減

世界のリーダーとして、エネルギー供給の在り方、技術と経済の仕組みのイノベーション

世界のリーダーとして

- ・ 「なるほど、よく世界のことを考えてものを言っている」と世界から評価されるようなグローバルな視野が必要。
- ・ 「ポスト京都」ではなく「ポスト2012」と。
- ・ 2050年までのシナリオが必要。今 次 次へと先進国の道筋を明らかにしていく

エネルギー供給の在り方

- ・ 日本における90年代からのCO₂排出量の増加要因は石炭。
- ・ 欧米では石炭貯留(CCS)と石炭発電所がセット。日本では活断層が多くて埋める場所がない。
- ・ 政府の原子力の位置づけは今でも確かであるが立地は限界。受け入れる自治体はどこにもない。原子力か安い石炭かをみんなに問うこと大事。
- ・ 電気代を高くして使用量を減らす一方で、再生可能エネルギー政策を積極的に進める。
- ・ 原発がいいというなら東京につくるべき。負担は同等にすべきであって、負担し合えないようなものはつくるべきではない。

技術と経済の仕組みのイノベーション

- ・ 今が時代の変わり目。GDP信仰からの脱却を。
- ・ 自然資本(natural capital)のストックがわかる指標も必要。
- ・ エネルギー供給構造を変える。エネルギー多消費型施設のあり方を見直す。技術イノベーションを起こす。の3つが大事。
- ・ 新しい価値観を反映させた「未来産業」が必要。ブレークスルーしなければならない。
- ・ 温暖化の解決は技術開発だけではできない。人間の基本的な考え方そのものが間違っている。
- ・ エネルギーや技術転換対策に寄りかかりすぎるのも危険である。

2 考え方・暮らし方の転換

- ア 炭素に価格が付与され、人々の暮らし方の転換を促すという方向
オイルショック時の教訓
- イ 人々が新たな文化的価値を理解し、自主的に暮らし方を変えていくという方向
ローカルイニシアティブの発揮
- ウ アとイとの好ましい相互作用によるCO₂削減サイクルの確立

キーワード4：炭素に価格が付される社会

CO₂削減サイクルの確立、 オイルショックの教訓、 質への投資・意識の共有、
暮らしの工夫、 京都エコポイント 「農」のすすめ（フードマイレージ）

CO₂削減サイクルの確立

- ・ 事業者と家庭の投資を促進。自分にも社会にも投資をという意識を醸成。それは「負荷」ではなく人間の本質的な豊かさにつながるものであることを示していく。
- ・ ヨーロッパの古いものや緑を大切にすまちづくりを参考に。
- ・ 石炭課税を実施すれば製品に転嫁され、人々の消費行動に影響を与えることが可能。
- ・ 環境税の使い道として、「新しい社会は環境に良くて健康にも良い。おまけに家計が浮きます」と示していくことが必要。
- ・ 環境税や排出権取引などの大きなマーケットが必要なものは国の政策。

オイルショックの教訓

- ・ オイルショックによって省エネが進んだことを教訓とすべき。
- ・ 英国の大臣は第二の産業革命だと言った。
- ・ 京都はエネルギー多消費産業がなく省エネ産業がほとんど。ビジネスチャンスはある。

質への投資・意識の共有

- ・ 長持ちさせることに価値を見出し、「質」に投資することが重要。
- ・ これからはストックの時代、生活の量ではなく質を重視する方向でのコーディネートが必要。
- ・ 我慢ではなく、人生にもプラスになりますよと訴え省エネ投資によって快適になるように促していくことが大事。

暮らしの工夫

- ・ 住宅対策は特に重要。家を丸ごと温熱環境の対策を図って熱源がいらない家にする。バリアフリーと合わせ、健康にも良い家作りになる。
- ・ パッシブな暮らし方の提案をする。
- ・ 私たちにできることをわかりやすく伝えていくことが大事。

京都エコポイント

- ・ エコポイントは家庭での基本排出削減枠を先行的に自治体が持ち、家庭に代わって企業に売る仕組み。環境税の代わりのようなもの。もっと大きな仕組みしていくことが大事。

「農」のすすめ（フードマイレージ）

- ・ 「食」の問題は重要。食料自治の象徴的存在。土地の文化性が高まる。
- ・ 土地はすべての人を支えている。食べ物を作り出し、子どもたちが遊ぶ場。人間の原点。
- ・ 「道德教育」ではなく「自然に学ぶ」、「農業」が大事。
- ・ 子どもたちには英語を教えるより農業を
- ・ これからは食べ物の地産地消など当たり前。
- ・ 「農」は人間として最低限やるべきこと。経済原理ではダメ。
- ・ 循環型社会の知恵と工夫がふんだんに込められた江戸時代の暮らしに学ぶべき。

キーワード5：考え方の転換

新たな文化的価値・価値観の転換、 欲望と理性、 文化的蓄積

新たな文化的価値・価値観の転換

- ・ 科学の仕事は終わった。もう「D O」しかない。
- ・ 科学は宇宙や生命、人間の不思議を解明すべき。経済性に流されるべきではない。
- ・ 現在の様々な地球レベルで起こっている問題は、文化の問題。
- ・ 地球温暖化問題を解決しようとするとき、「考え方」がすごく大事。この問題は「個」の問題と「全体」の問題がつながっており、解決のためにはシステム化と強制力が必要。
- ・ 世界には東洋と西洋の二つの方法、尺度がある。
- ・ アダム・スミスの「見えざる手」は道德論を前提としていた。今や根元となる「道德」がない。
- ・ 文化の違いを認識しながら、中長期ビジョン時間軸上のシナリオを作っていくことが大事。
- ・ 一人ひとりの立場に立って、真の満足が得られるような暮らし方を世界全体で進めるにはどうしたらいいか。
- ・ 「半農×半X」という発想で暮らしていく。
- ・ これさえやれば大丈夫という絶対的な解決策はない。試行錯誤でよい。
- ・ 人々が新たな文化価値を理解し、自主的に暮らし方を変えていくという方向にいかにもっていくか。
- ・ 自然観や心構え、ライフスタイルなど、個々人ごとに必ずしも一体ではない。そのギャップをどう結びつけるか。
- ・ 文化をどのように捉えるか。文化は個々の行為の中にあるとともに、全体を調整できるもの。
- ・ コーディネーションの装置としての「文化」を活用しながら、日本と世

- 界を低炭素社会に向かわせる。
- ・ 温暖化対策としてやるべきことは、方向性や価値観を示すこと。

欲望と理性

- ・ 飽くなき長寿への欲望。「腹八分目」という諭しはどこにもない。
- ・ 予防原則という点で、温暖化対策と健康はよく似ている。
- ・ 負担を受け入れることで、自分で自己をコントロールすることができ、改善されていく。
- ・ 破綻に近づいて行った時、どのあたりで変われるのか。理性との戦い。

文化的蓄積

- ・ 生き方や考え方を変えていくというとき、「現在」に生きる人々だけでなく、過去に生きてきた人々の意識の積み重ねが必要。
- ・ 50年から100年、過去は確かに少しずつ変わってきているが、急には変えられない。過去のやり方を尊重した方がいい。

キーワード6：暮らし方による発信

シンボリックなもの、 ローカルイニシアティブの発揮、 京都からの発信・DO YOU KYOTO?

シンボリックなもの

- ・ ライフスタイルや考え方を転換させていくとき、何らかの統一のシンボルがあるとやりやすい。
- ・ オフィシャルに国民の生き方を方向付けしていくとすれば何らかの強制力が必要で、そのための根拠がいる。
- ・ 日本はなんでも、最終結論は多数決で決まってしまう。「京都」が本気でやるなら別。

ローカルイニシアティブの発揮

- ・ 公害問題の対策には、多くの学者が海外から学びにきた。
- ・ 「ローカルイニシアティブ」により、国からではなく市町村等から提案され、官と民の間で目標やルールが決められ制度ができていった。
- ・ 国の役割と自治体の役割を明確にし、それぞれの地域産業にあったやりかたを進めていく。
- ・ 京都エコポイントは民生部門対策として良いスキーム。参加する消費者が得をするしくみ。今後は住宅リフォームなどメニューを増やしていく。
- ・ 我々の知恵を生かして、京都ならではの品のある提案を。
- ・ 都市部では「脱自動車」に取り組むべき。

京都からの発信・DO YOU KYOTO?

- ・ 「ローカルイニシアティブ」は大事な発想。懇話会からは「世界の京都」というスタンスで発信していくべき。
- ・ 「日本」とは何か。日本を象徴する「京都」とは何かを議論し、「京都」

は今世界に向けて何を訴えられるのかという視点で議論し発信すべき。

- ・ 「自慢できる京都」を明らかにする京都の「見える化」が大事。
- ・ DO YOU KYOTO?の「見える化」を図る。
- ・ 源氏物語のように千年前の京都には大変洗練された文化が存在した。千年前のヨーロッパにはない文化。
- ・ アメリカ的先進性ではなく、このような京都の文化的先進性を打ち出すべき。
- ・ 江戸の文化は町民型、コンセプトやものの考え方は京都。これを発信すべき。